



私学受験オピニオンリーダー誌

選ばれる 私学

®

— 第6号 —

参加校



青稜中学校・高等学校

〒142-8550 東京都品川区二葉1-6-6
tel 03-3782-1502
web <https://www.seiryo-js.ed.jp/>



駒込中学校・高等学校

〒113-0022 東京都文京区千駄木5-6-25
tel 03-3828-4141
web <https://www.komagome.ed.jp/>



100校プロジェクトを目指して

保護者が応援したくなる私学

我が子のための私学

自分らしさを育てる私学

明日をひらく私学

わが校の校風と未来の私学

わが校の名物教師いる私学

選ばれる私学とは

その条件と資格

駒込中学校・高等学校
校長 河合 孝允



世界的にみて私学が許容される国は少数派である。なぜなら、「徴税・兵役・教育」は国民の義務として国家によって統制管理されるからである。フランスにおいても私学はミッション系の私学以外はフランス革命によって禁止されている。今、アメリカでは教育権を一定年限チャーターした「チャータースクール」が燎原の火の様に拡大しているが、営利追求型私学がほとんどであり、日本のような建学の理念に基づく、営利を目的としない学校法人組織としての私学とは程遠い。

ところで、「教育の自由」とはそもそも「思想信条の自由・精神的自由権」を担保するものとして民主的国家においては憲法上第一義的に保障されているものである。この基本理念の上に私学教育の自由と独自性も担保されている。オランダでは「財政平等の原則」が憲法上確立していて私学も公立同様100%公費で賄われている。この考え方はドイツでも同様であり、バーデンヴュルテンベルク州憲法第14条では「公のニーズにこたえ、教育的に価値があると認められ、かつ公益に立脚した私立学校は財政的な負担の均衡を求める権利を有する」と述べられ、経常経費の75%~85%の私学助成が行われている。また、精神的自由権の中には、国

民の自由な宗教教育権も含まれる。よってここから、宗教系私学における「傾向経営＝理念的
目的に奉仕する経営」が法的に認められることになり、本校のように比叡山研修などの宗教
的諸行事を導入して独自教育を行う自由が憲法上与えられている。教育を受ける側からいえ
ば、宗教系私学に子弟を通わせるという事は、国民の基本的権利であるところの「信教の自
由」に基づく「親の教育の自由権・宗教教育の自由権」を行使することになる。しかし、戦後の
日本は民主国家の仲間入りをしたが、教育行政は「昭和16年体制」といわれる一律主義教育を
色濃く残したまま「公立中心主義的」に戦後教育が行われ現在に至っている。その結果、日本
の私学は「民営扱い」のまま「公立」の蚊帳の外に置かれ、どこまで行っても「自助経営」によ
って成り立つ「教育機関」とされている。そして、その財源は入学生の実保護者からの寄付金（授業
料）によって支えられている。日本では「自助・共助」が私学経営の基本であり、「公助＝公費助
成」は最後の手段とされている。言い換えれば日本の私学は保護者の浄財（寄付金）で成り立
つ教育機関とされているのである。その主たる浄財（寄付金）を「授業料」と呼んでいるのであ
る。すなわち、公費（税金）はそれを補填する「補助金」でしかないのである。したがって補助金
行政が国や自治体の私学政策となる。また、「民営の私学に公費は支出できない」という立場
を崩さず、それが出来る様にするために、私学を便宜的に「寄付行為で運営される教育機関」
と定め、「誰の所有物」でもない「学校法人」とされる。たとえ「設立オーナー家」といっても「学
園の所有者」ではなく、「建学の理念」のもとに「理事会」のメンバーが営利を目的としな
い「無私精神」で運営に当たる「学校法人」とされるのである。すなわち、私学は建学の理念
に基づく「理念体私学」と呼ばれる。これが塾や予備校と異なる「私学＝一条校」の原則規定で
ある。ところが近年、政府の財政難に伴う「聖域無き構造改革」以来、株式会社立の私学も認可
されるようになった。だがこの種の私学は明らかに「利潤追求型私学」であり、これまでの様
な「理念体私学」とは本質的に異なる。大切なことは、次世代の子供たちのために、教育格差の
無い社会を実現することである。好きな勉強を好きなだけ無償で受けることのできる教育環
境を整備保障して行くことである。私学は富裕層だけのものではない。国民各層に平等に開
かれた学び舎でなければならない。本校は江戸の天和2年（1682）以来、340余年の歴史と伝
統を刻む学び舎である。そのレーゾンドートル（存在理由）は子供は国の宝であるという普遍
的価値観の上にある。学校のために生徒がいるのではなく、生徒のために学校があるという
常識が基本にある。私学存続の条件もまたここにある！





青稜中学校・高等学校

校長 青田 泰明先生

自ら授業を受けもち、生徒とのコミュニケーションをとっても大切にしている青稜中学校・高等学校の青田泰明校長先生。青稜中学校・高等学校の教育内容や取り組み・魅力などについて、生徒との対談の中でお話をお聞きしました。

青田校長 まずは、みんなに聞いてみようかな。Y(中3男子)くんは数ある選択肢の中、どうして青稜を選んだの？

Y はい。僕は、小学校から野球をやっていたんですけど、中学からはしっかりと勉強もやろうと思ひまして。「文武両道」ということを考えた時に、施設や、生徒の雰囲気などから青稜が一番だと思ったんです

青田校長 なるほど。勉強との両立は重要な点ですね。じゃあ、S(中3女子)さんはどうですか？

S 私は青稜のパンフを見た時に、SDGs部というのをまず見て、他の学校にはなかなかない珍しい部活だと思って。小学校の時から、SDGsに関しては授業を通して考

えていたことでもあるので、そうした部活がある青稜に興味を持ったんです。

青田校長 なるほど。たしかにその通りで、Yくんが言っていた文武両道も含めて、とにかく子どもたちに選択肢をたくさん与えたいというのが青稜の方針なんです。例えば、SDGsという理念も、世界的に見てもとても大切な課題であるにも関わらず、部活動として取り組むというのは、他の学校ではあまり見ませんよね。そういった点では、青稜ならではの新しい挑戦だと思います。私たちとしては、トライ＆エラーを繰り返しながら、子どもたちと一緒に何かを創り出すことをしていきたい。おこがましいかもしれませんが、それが「青稜」という学校が、私学の中で果たす役割だとも思っています。

選ばれている理由と他校との違い

青田校長 自分たちだけが選ばれているとは思いませんし、特に東京の私学はどの学校も切磋琢磨しているとは思いますが、青稜の個性としてみなさんに響いている

ものがあるとすれば、「面白いことをやりそうな学校」という部分は大きいかと思いますよね。常に、毎年、新しいことをやっている、挑戦を続けているとことが、今の時代にマッチしていて、多くの受験生や保護者にも響いているのかと思います。

「創立時から変わらない教育」と「時代とともに変わってきた教育」について

青田校長 教育はいつの時代も、常に変わる部分と変わらない部分がありますよね。青稜でも同じです。具体的な話だと、コース制をとらない、人と人とのつながり、「対面」を重視するといった部分は創立当初から変わらず重視してきました。ただ、コロナ禍では「対面」授業が不可能になり、それに代わるものとしてオンライン授業を導入した経緯もあります。

ちなみに、コロナ禍を経た今では、対面授業の原点に還りつつも、オンラインでの学びも同時に活用していくような学習を取り入れています。Google classroomの活用、iPadの貸与などは、そのひとつの結果ですね。学校の中で学習を完結させるSラボ、教科の枠を越え、非認知能力を高めるゼミナール授業なども、青稜の「新しい」取り組みのひとつです。

生徒のみんなは、そうした青稜の教育はどうですか？

Y そうですね。Sラボがあるので、校内での練習の際は、部活が終わった後、1時間か2時間はSラボで勉強してから帰ります。家だとなかなか勉強もできないの

で、学校で宿題を終わらせることができるのは助かります。

S ゼミナール授業は本当、楽しいです！いま受講している坂口ゼミでは、短歌を扱っているのですが、短歌を通して人とコミュニケーションをとったり、短歌の大会に作品を出したり、なかなか普段の授業でできないことができて楽しいですね。昨年とっていた校長先生のゼミでは、普段は自分から関わることのない企業の方と「つながり」ができるのは貴重な経験でしたね。楽しみながらも成長できるのは、本当、やりがいがありましたね。

最後に、青田校長先生から在校生や卒業生、受験を控えている皆様にメッセージを頂きました。

在校生・卒業生へのメッセージ

青田校長 在校生には、3年間・6年間で「希望」を抱いてもらいたい。卒業生には「誇り」を抱いてもらいたい。こうした「希望」と「誇り」が交差する場所でありたいと思います。

受験生へのメッセージ

青田校長 われわれは、新しいことや失敗することを恐れずに、一歩前へ進むことができる人を育てたいと思っています。「挑戦」を楽しめる人は、ぜひ青稜に来て欲しいと思います！





青稜中学校・高等学校

募集広報 谷田 貴之先生

先生から見る、学校の魅力・アピールポイント

青稜では中学の段階で「自主学習」の習慣を定着させるための、さまざまな環境を用意しています。勉強は「やらさせるもの」「やらないといけないもの」という意識から脱却し、「自分からやるもの」、さらには「楽しく、わくわくするもの」という感覚を持てるようになることが、中学時代の通過点でもあり、高校以降の進路実現のスタートでもあると捉えています。そのためのサポート体制のひとつが「Sラボ」という自習システムです。夜21時まで開放している自習ブースには、数名のチューターが常駐し、生徒達の放課後の自学を見守っています。もちろん、学習を進めるうえでの疑問点を解決してもらうこともできるし、学習計画の相談に乗ってもらうことも可能です。あくまで「自学」というスタイルではありますが、ICカードで入退出時間を管理、生徒たちの学習をしっかりと見守ります。もちろん、活用方法は自由。テスト対策に使う生徒も多いですが、中には、部活が終わったらSラボで宿題を終わらせてから帰宅する生徒もいます。

また、そうした学習の成果や反省点、テストの目標を記入する「自己管理手帳」も活用。自身の学習の軌跡を可

視化(見える化)することで、PDCAサイクルの確立を促していきます。さらに高校に進学すると、放課後講習や最難関大講習など、大学進学に向けた講座も開設されます。6年間かけて、希望進路の実現に向けて、がっちりとサポートしていきます。

教育を行う上で大切にしていること

「やるべきこと」という学習の側面は否定できませんが、同時に「楽しいもの」という原点に返ってもらいたいと思っています。本来、誰もが知的好奇心を持っているはずなのに、いつのまにか「やらないといけないこと」という意識が支配的になり、場合によっては効率的に知識を詰め込み、解法を暗記するような行為が「勉強」の性質にすり替わっていきます。もちろん、受験という通過点がある以上、やむを得ない面もあるのですが、中学入学のタイミングで、本来「学び」が持つ楽しさに気づいてもらうことも大切に思っています。生涯学習の時代において、そうした姿勢を育んでいくのが、われわれの使命でもあるのではないのでしょうか。





生徒とのコミュニケーションについて

青稜ではチャレンジ精神を大切にしていますが、挑戦をためらう気持ちは、失敗を怖れる気持ちに起因するケースが多いようです。失敗を怖れずに、挑戦を楽しむのに必要なのは、自己肯定感ではないかと思います。自分の存在に対する「自信」があれば、多少の失敗も怖れません。また、そうした自己をさらなる高みに到達させようという向上心にもつながりやすいです。そういう点で、生徒とのコミュニケーションで大切にしているのは、生徒を認めること。もちろん、不適切な言動や、修正しなければいけないふるまいなどには教育的な導きをしますが、常に生徒へのリスペクトは欠かさないようにしています。そして、そうした関係性が、青稜の教員と生徒の間の信頼関係につながっているようにも感じます。

青稜の生徒の「ここが自慢」と思うポイント

青稜では、チャレンジ精神を大切にしているという話は先ほどもしましたが、生徒たちの様子を見てみると、もうすでに立派な「チャレンジャー」であると感じることが多いです。われわれ教員が敷いたレールを真っすぐに進んでくれる原動力は十分に備わっているのですが、それだけではなく、時として魅力的な迂回路を、時としてショートカットコースを示してくれます。最近では、生徒会の提案で校則が更新されたり、中学生の有志により新たな行事が開催されたりと、生徒たちのアイデアで、さらに学校が活性化していく実感があります。まさに、教員と生徒が一体となって、よりよい「青稜」を創っているという感覚がひしひしと感じられます。

受験生へのメッセージ

受験という大きなチャレンジに向き合っているみなさん、今は「合格」という唯一の目標に向かって邁進していると思いますが、このチャレンジのプロセスそのものが、人生の大きな糧になっているはずです。自分を信じて、今までの努力に自信を持って（もしくは、自信を持てるように）全力で取り組んでください。そして、できることなら「楽しんで」ください。ご縁があれば、青稜の学び舎でお会いしましょう！





青稜独自の授業紹介



青稜中学校・高等学校では、中学2年生と3年生を対象に「ゼミナール授業」を実施しています。この授業は、生徒が自分でテーマを選び、少人数で深く学ぶことを目的としています。今年度は、校長が担当する「SDGs」ゼミや、気象、思考力養成、アニメ、英語、スポーツなど、多彩な14講座が実地されています。今回は「青田ゼミ」と「谷田ゼミ」をご紹介します。

「青田ゼミ」について青田先生にお話をお聞きました。

ゼミナール授業(以下ゼミ)の構想自体は2018年からあり、それを私が校長に就任した2020年からスタートさせました。目的としては主に二つあります。本校には色々な分野の知識・能力を持っている教員が多かったため、そういった教員の新たな一面、すなわちスペシャリストではなくゼネラリストとしての側面を、生徒たちに見せてあげたかったというのが一つ。またもう一つは、大学入試の形式が変容していく中で、教科教育だけではなく読解力や論理的思考力、表現力といった非認知能力の育成に力を注ぐためには、既存の授業内にそれらを組み込むだけでなく、新しい形の授業体系を構築する方がより効果的だと考えたことです。

授業を通じて生徒に学んで欲しいこと

たとえば、私が担当しているゼミは、多くの企業の方方を招聘して彼らのSDGsに対する取り組みを学

び、グループディスカッションの中で生徒たちに新しいアイデアを考えてもらうという形を取っていますが、生徒たちにはこの授業を通じて、課題に対して深く思考すること、それを理解しやすく表現すること、さらには他者と協同することなどを学んでもらいたいと思っています。また、この他にもゼミは全部で14種類あり、実験室に一年間こもりっきりのゼミもあれば、アニメや漫画を題材に読解力を鍛えたり、天気予報について専門的に学ぶゼミもあります。選択制なので、大学と同じように人気が集中するゼミは抽選となってしまいますが、こうした取り組みも生徒たちには好評で「来年こそはあのゼミを取りたい!」「想像していたよりも楽しいゼミだった!」などの感想をもらうことも多々あります。「自分で授業を決める」という行為が生徒たちにとっては新鮮ですから、その部分もモチベーションに繋がっているのだと感じています。

「谷田ゼミ」について谷田先生にお話をお聞きました。

私は国語教員として、多くの「物語」を「読解」する授業を展開してきました。言語を扱う教科である以上、その対象は言葉によって紡がれる「小説」がメインでした。しかし、私たちは幼い頃から、もっと多様な形式の「物語」を味わい、楽しんできたはずです。たとえば、マンガやアニメ。これらの物語は、この形式でしかない表現技法に満ちていて、それぞれの物語世界が広がっています。ゼミでは、普通の授業では扱うことのできないマンガやアニメといったジャンルを扱い、読解力や思考力、さらには自らが表現の主体になる機会も設けることで、生徒たちの表現力も培っていきたいと考えています。

この授業を通じて生徒に感じてほしいこと

アニメや映画、マンガでさえも、今はサブスクの配信で見放題の時代。私たちの時代に比べると、作品に触れることは容易になりました。とは言え、いつでも手軽に作品に触れられる環境は、作品鑑賞の「質(深さ)」よりも「量(広さ)」を加速させ、まるで消費するように作品を流し見るようになってしまいました。しかし、視覚作品

においては、情景描写や人物の表情、ちょっとした仕草に、さまざまな「メッセージ」が込められていることも少なくありません。作品が「消費」の対象となっている現代だからこそ、深く作品を鑑賞・読解する「眼」を育ててほしいと思っています。

この授業に対する先生・生徒の評判

私自身、普段からアニメや映画を鑑賞するのが趣味のひとつでもあるので、最近観た作品や、かつて(生徒たちと同じ年齢の頃に観た作品)の話などから、授業に展開することが多くあります。そういった話は、生徒にとっても興味深いようで、いつも熱心に聞いています。一方で、生徒たちが感銘を受けた作品の話などを聞くのも、とても興味深いですし、そうした情報の交換から得られる「気づき」も多く、互いに刺激を受けています。また、2年前には、ゼミのメンバーが中心となって「青稜アニメーション」という部活動を発足、今ではクラウドファンディングなどで資金を集めつつ、作品の制作に励んでいます。





駒込中学校・高等学校

学校長 河合 孝允先生

駒込学園の立ち位置

—「Society5.0超スマート社会」に向けて

時代はまもなく人類が一度も経験したことの無い大変革期に遭遇する。言語生成系AIによるシンギュラティを伴う、5番目の時代「Society5.0超スマート社会」を迎え、「Information on Demand」の社会が急速に到来するからである。ユーザーへのリソリューション（問題解決請負）を商品化したベンチャー企業が無数に立ち上がり、顧客ニーズに合わせた情報システムの構築・設計・開発・保守といったアウトソーシングサービスや、企業戦略用のシステムインテグレーションサービスがあまねく普及し、全世界にメディアコンピュータネットワークシステムが行きわたる時代となる。その結果、人と人とのヒューマンリレーションも、瞬時にトランスフォーメードあるいはファンダメンタルチェンジされる時代が到来する。

この時、学校だけが蚊帳の外にいることは出来ない。これまでの学校システムそのものが根底的に変わる。これまでの学校は、「教員の持つ答えに合わせて学ぶ・教室に合わせて学ぶ」ということが普通に行われてきた。しかしこれからの時代は、生徒各自が先生よりも先にいくらかでもICTを駆使してオンデマンド（直接的）に

答えを瞬時に知ることが可能となる。教師の持つ解答にいかに早く正確にたどり着けるかの競争（テスト）は意味を失う。これからは、教室に合わせて学ぶのではなく、学びに応じて教室を変える時代となる。これを「Flipped Learning（反転学習）」という。即ち、「Department of Flipped Learning Technologies」の時代が切って落とされる。

ところで、Society5.0超スマート社会を牽引する人材は、内閣府の有識者会議が述べる如く、技術革新や価値創造の源となる飛躍智を発見創造する人材と、それらの成果と社会課題をつなげ、プラットフォームビジネスを創造する人材である。また同時に、課題解決を思考するエンジニアリングデザイン能力及び、真理や美を追求するサイエンスアート能力の両者を合わせ持った人材である。さらに、多くの人々を巻き込み牽引して行くリーダーシップ並びに社会的スキルを持った人材である。そして、思いやりの心を持ち、多様性を尊重し、持続可能社会を志向する倫理観・価値観を持った人材である。本校の立ち位置はまさにここにある。粛々と温故知新改革を進めて行く。

「駒込学園の魅力」

企画広報室 五反田 寿美子さん

駒込学園の魅力

駒込の魅力は、渋沢栄一の「論語と算盤(そろばん)」のように、一見かけ離れたものが融合しているところにある。

日本初の高校3年間継続したSTEAM授業を取り入れた理系先進コースや多くの私学に先駆けて実践したグローバル教育、ICT教育。また、Chat-GPTに対応する高度情報化教育などに代表される「先進性」と340年の歴史をもつ「伝統」、そして仏教主義に根差す「心の教育」。この一見矛盾する要素がうまく融合しているところが、駒込の多面性を形作っている。

「矛盾する要素が融合していること」を突き詰めると「駒込の魅力」は多様な価値観を受容する土壌の豊かさにあると言える。その根底にあるのは仏教的な「平等観」だ。単に等しいことを強要する一律主義ではなく、100人いたら100通りの価値観があるという、お互いに差や違いがあることを認知した上で両者の自由と平等を認めるという考え方である。

その豊かな土壌で育った生徒たちが駒込学園の魅力そのものである。彼らが卒業時に残してくれたメッセージを紹介して、本稿を閉じたい。

【生徒の卒業メッセージ】

筑波大学医学群医学類に進学した生徒(中1～高3駒込中高野球部に所属)

「やりたい事が決まらない君へ。もし君が将来のことを決めかねているなら、駒込学園に来るといい。ここには自由がある。東大を目指す者から、芸術の道に進む者、スポーツに青春を捧げる人までが何にも縛られることなく自由に活動している。そして君の夢を支える人と環境がここにはある。多様性を認め合うこの学校

には、君の夢を笑う者はいない。それに自分のやりたいことだって、きっと見つけれられる。駒込学園は、比叡山での研修や留学などを通して自分自身を見つめなおす機会を用意してくれる。そして君が何かを成し遂げたいと思ったとき、駒込学園はきっと君の支えになってくれるはずだ。」

東京藝術大学美術学部先端藝術表現学科に進学した生徒(高1～高3駒込高美術部所属)

「僕が駒込高校について言えることは、この場所は余白のある場所だということだ。駒込高校は次の時代の人材育成に向けて伝統的な仏教教育から最先端の教育理念を、惜しむことなくインストールしている。部活動でも様々な部活が結果を残している。しかし、学校にないものもある。僕の場合は美術だった。駒込は特別美術に特化したクラスがあるわけではない、至極普通の高校である。そんな環境の中で僕は美術について情報に飢えていたので、本やでよくわからない美術書を買ったり、ギャラリーに行って作品を見たりしていた。やればやるほど学校の用意した学びの庭からはみ出ていったが、それでも駒込高校は僕の居場所を文字通り残しておいてくれた。教室の端っこのロッカーは、周囲も容認する僕のギャラリーだった。」



第66回学展 大賞受賞作品「百鬼夜行」水野幸司



駒込独自の授業紹介



駒込高等学校では、生徒たちそれぞれがこれからの時代に対応したライフデザインを描いていけるように「特S/Sコース」「国際教養コース」「理系先進コース」の3コースに分かれています。今回は論理的思考力・多元的な視点・問題探求力を育てる「国際教養コース」と、各教科の知識を組み合わせ身近な問題を解決できる人材の育成を目指す「理系先進コース」の授業をご紹介します。

国際教養コースの取り組み

今まさに訪れているグローバル化の波を自分自身の力で乗り越えていくために、生徒一人ひとりにとって、異文化理解や異文化コミュニケーション能力はますます重要になります。その際に、国際共通語である英語力の向上はもちろんのこと、むしろ英語を武器にして、主体的に社会的な課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することを国際教養コースでは目指しています。

また、未だ日本の教育の主流である「知識詰め込み型」の教育を脱却し、「現代世界論」や「異文化理解」といった駒込オリジナルの世界標準カリキュラムを通して、生徒たちの異文化への寛容な姿勢の育成と多角的視野を育む教育を重視していきます。同時に異国を知ることで自国の伝統的な文化の大切さや日本固有の考え方を再認識

し、グローバル時代に必要な真の多様性を育みます。つまり、国際教養コースは社会学の分野をワールドワイドな視点で学ぶため、英語や社会科に興味・関心のある生徒、また世界に羽ばたいて活躍したいと思っている生徒に学んでもらいたいと考えています。



「現代世界論」高1プレゼンの様子



生徒プレゼン後、武石先生の講評とアドバイス

以下、駒込学園広報誌「駒込だより」に掲載された国際教養コースの特徴的なカリキュラムを2つ紹介します。

「三言語主義」でコミュニケーション能力や国際的な視野を養う「フランス語授業」

英語科・国際教養コース主任 西村郁美

グローバル化が進行する世界では、「国際語」である英語はもとより、異文化理解の精神を踏まえた外国語のコミュニケーション能力が不可欠です。そこで、一つの言語を学ぶことは、「一つの世界の広がり」を意味します。これから日本を担っていく子どもたちには、母語、英語、そしてもう一つの外語を学ぶ「三言語主義」が求められていると考え、本校の国際教養コースでは英語でフランス語の授業を行っております。

フランス語と英語はともにラテン語を起源としており、その類似性や相違性を通じて、言語の進化と相互影響についての知識や歴史的かつ文化的なつながりの理解を深めています。国際機関の世界では、フランス語は英語と並ぶ公用語のひとつであり、国際連合（UN）、世界貿易機関（WTO）、経済協力開発機構（OECD）、国際オリンピック委員会（IOC）、欧州連合（EU）などでも広く使用されています。国際舞台で活躍することを目指す生徒は、将来フランス語に出会うことは必至でしょう。授業内では様々な形式のアクティビティが組み込まれており、ペアワークやプレゼンテーション、そして宿題を通じて、日々の学習が効果的に定着するよう工夫されています。これにより、生徒たちは単なる言語の習得だけでなく、コミュニケーション能力や国際的な視野を養っています。

世界の文化や社会、時事問題について発表・討論する「現代世界論」

社会科主任 武石慎一

国際教養コースを立ち上げる際に国際部部長から依頼されたのが、「目玉となる授業を作ってほしい」ということでした。コースの基本コンセプトが「次世代のリーダーになる人材を育てる」ということですから、パッと思いついたのがプレゼン能力とディベート能力の育成をする授業、さらに他人の発表を評価する能力も育てる授業はどうだろうかということでした。さて、何が出来るだろうと試行錯誤した結果が現在のスタイルです。

高1はチーム対抗のプレゼン。いわゆる「入札」制で順位をつけます。一年間で人前で発表することに慣れ、効果的な資料を作る能力を育てます。高2はチーム対抗のディベート。見ている生徒たちの投票で勝敗を決めます。一年間で相手も尋問に即応できる能力と聴衆を味方につける話術を育てます。高3はテーマ設定からプレゼンまですべて一人で行い、質疑応答もあります。見ている生徒たちが各々4段階で評価をつけ、その平均が発表者のポイントになります。三年間の集大成というわけです。なお、各学年とも発表ごとに総括レポートを提出し、これを教員が評価することで最終的な成績を決定します。

高1の時は原稿から目が離せず、声も全然通らなかった生徒が、高3で堂々と発表し、容赦のない質疑にも狼狽えることなく答える姿を見ていると、この授業を始めて良かったと感慨深いものがあります。今年も一人前のプレゼンターが旅立っていくことでしょう。



クラスメイトのプレゼン評価は生徒がする

理系先進コース「STEAM授業」

駒込高校の理系先進コースは、自分の意志で問題発見、問題解決のできる人材の育成を目指しています。具体的には「自らの知識や経験を元にして、未知の事柄に対する自分なりの意見を持てる」「既成概念に対して、自分なりに考えてみる」「自分の考えを正しく伝え、また他者の考えを正しく理解し、比較検討、改良ができる」「実際に自らの考えを実践に移し、その経験をフィードバックできる」などのことを求めています。

「はい、じゃあ始めてください」

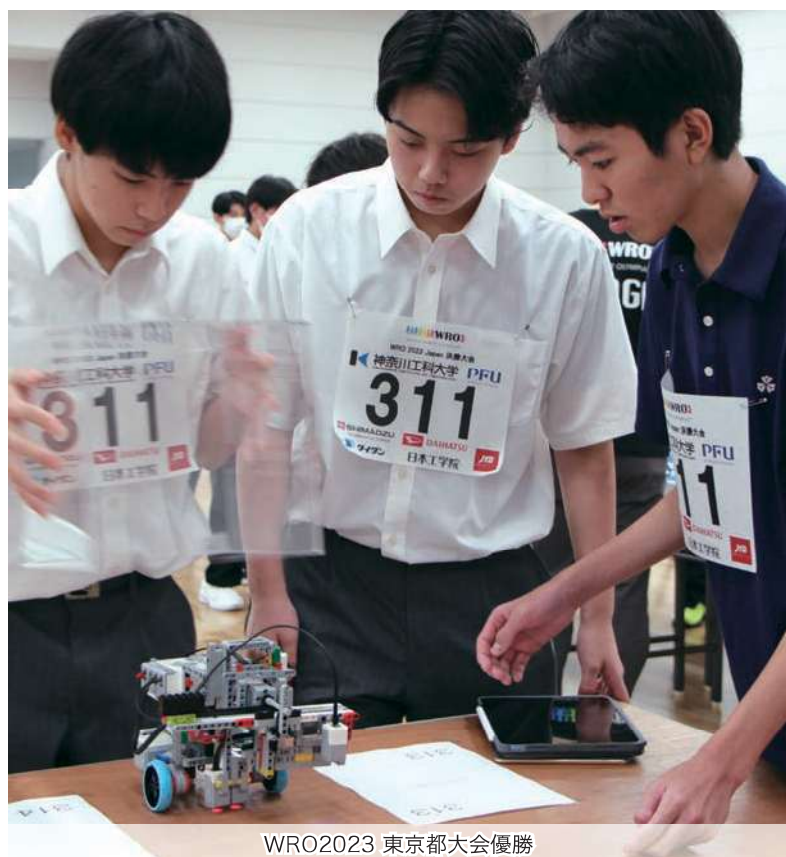
授業開始のチャイムが鳴り、理系先進コース主任の中島先生から連絡事項を伝えられるとすぐに生徒たちはロッカーからそれぞれの装置は道具を取り出して作業を開始します。

グルーガンを手に、薄いプラスチック板で箱のよう

なものを組み立てはじめた生徒は「煙に映像を映す『フォグスクリーン』を作っています。これは煙を発生させる装置。文化祭の屋台で、料理からでる煙に突然、中島先生の顔が浮かび上がったら盛り上がると思いませんか？」

煙はグリセリンと水を反応させて作るという。「スクリーンにするには、まっすぐ上に上がる、濃い煙が必要。前は加湿器の水蒸気で試したが、うまく映らなかった。そこで、ライブの演出などに使われるフォグマシーンについて調べたら、グリセリンと水の煙を使っていました。だから次はそれを実験してみます。」

ウィーンという音とともにモーターを回転させはじめた別の生徒は、ドローンを自作している。「プロペラでどう浮力を得るかとか、基板の設計や機体の素材など、ドローンを飛ばすには様々なジャンルの知識と技術が必要。自分で作ればそれば一度に学べると思っています。」いまの試作機は数cmホバリングさせるのがやっ



WRO2023 東京都大会優勝



高1「科学探究」基礎実験



第10回宇宙エレベーターロボット競技会 エキスパート部門
関東オープン準優勝 全国大会4位

と。「モーターの出力を上げなきゃいけない。でも、機体が重くなったらダメ。そのバランスが難しい。」

十作目という試作機にはまだカバーはついていないが、基板とモーター、プロペラの組み立ては完成している。モーターの出力やプロペラの大きさ、全体の重量やバランスなどの条件を変えながらベストな形を探っている。

レゴブロックで作った車を動かしながらパソコンの数値を見つめている生徒は「目指しているのは、注文した荷物が『注文した本人の現在地』まで届くシステム。今やっているのは、移動し続けるものとの距離を常に把握し続ける実験です。」ラジコンカーの操作はスマートフォンで行い、その方法は同じSTEAM授業を受けている友達からヒントをもらった。「最初、自分で一から作ろうと思っていましたが、友だちがアンドロイド版のアプリをカスタマイズしてどんどん作業を進めていくのを見て、『既存のものを使うのもいいかもしれない』と、既存のものを改良して使うことにしました。」

一方で中島先生は、生徒と同じように教卓の周辺に装置を広げて自分の実験をおこなっている。「生徒たちは自分でテーマを見つけ、自分で進めていく力があるので、私も彼らと同じように自分の実験をしながら見守っています。実験が上手くいかないときや、アイデアに詰まった時は、彼らと一緒に考えます。」

最初に紹介した、フォグスクリーンに取り組む生徒が加湿器の水蒸気でうまくいかなかったときの動画を見ながら、「これ、プロジェクター側にも原因があるんじゃない?」「あ、そうか。先生が使っているそのプロジェクターを見せてください。」そんなやりとりで他の生徒たちも自然と耳を傾け、疑問があればどんどん会話に加わります。

「“正解”は一つではないし、結果として何が“正解”だったのかは、彼ら自身が判断します。そうした学びの過程を楽しんで欲しいし、私も彼らと一緒に楽しんでいます。」

理系先進コースは、埼玉大学STEM教育研究センターとの共同授業である「STEAM I・II・III」の他に「科学探究」「科学統合」といった独自カリキュラムや社会で活躍している方を招いてお話を伺う「JOBサロン」を開催し、常に最先端の情報を提供し、生徒の興味関心をさらに高める取り組みをしています。

その結果、ロボットコンテスト「WRO2023レギュラー部門」では東京大会優勝、「第10回宇宙エレベーターロボット競技会 エキスパート部門 関東オープン準優勝・全国大会4位、科学系コンテストでは「第11回東京都高等学校理科研究発表会」では『コミュニケーションに関する研究』で3位にあたる審査員特別賞、そのほか企業連携などの成果を収めています。



理系先進有志による校舎のプロジェクションマッピング